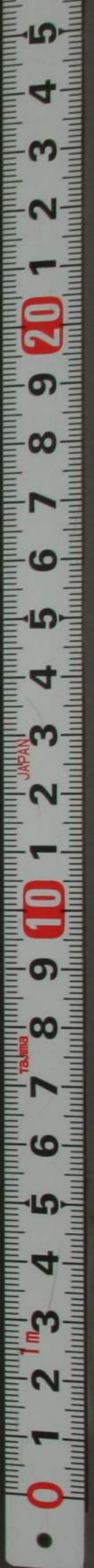


里見八犬傳  
第 輯  
卷五

13  
709  
53



遠 13  
第 709  
卷 13



明治三十八年  
十月九日  
購求

南總里見八犬傳第九輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第百回 舊黨招不應と土民益憂ふ  
返寇術と異ふと美人弥奇き

却説墓田權頭素藤ハ奸計既ハ行れて館山の城ヲ獲テより先兎巷遠親ガ  
三旗と誅戮してその叛逆の罪惡と他一人ハ肩一ツ陽カケり賢良貌と七先代の  
惡政と改むといふとる民と極土と愛して廣く施と好む似これ誰ラその内心と賽  
時政小玉芥の綽號肩せんよりありと知る死年來小鞠谷如滿が暴虐小淵蔽る  
民ハ向く士卒們ハ半馬と兼替る賢君よりと稱賛多々皆歡びて仕へけり當下  
素藤思ふや我ハ他郷の浮浪人也猛可ハ夷瀟一郡の主ホリと當國の武士  
們ガ媚くあふも他們ハ才ハ一城の小敵されバ怖るハ足ら只左不就ても右不就ても悔

八犬傳九輯卷之五

文藝堂藏

かゝる里見の義実義成相續して既上總と併吞され當城も那麻下在り。  
當初里見義実が結城の城と没落して安房へ流寓され折神餘が與義兵起  
きて那逆臣定包と討て長挾と獲たり。我が遠親と誅戮して夷瀨郡司の  
子と這那夏似れども時と勢と同一に今當城の士卒們の我身の羽羽異なるべし又  
那金碗考吉の智勇に似るものも諸第恩願の老黨も杉倉堀内の如きのあり  
む然ると里見不肖と祭て獨立割居の脰と張り。そそ大敵と招く姑く他に従て徐  
謀るふあくとわす。とて尋思とあり。隨使浅木碗九郎并小奥利本膳の  
示し使として準備の費と資財より安房の稻村の城遣して里見の四家老杉倉堀内  
東荒川們に就て今番館山の城内の乱と訟て夏徳々々の事を。扱も當城の王小鞠  
や老も助如満の年来暴悪の眞面目ありけり。往日家臣兎老幸弥太遠親の殿  
谷王馬助如満の年來暴悪の眞面目ありけり。往日家臣兎老幸弥太遠親の殿  
れ訖ぬまは。其田權頭素藤と喚做まのあり。殿宣する。諏訪明神の神職と

いとも文学あり武藝も長ら。且心操慈善なり人の真愛ひん分り。あをのそ  
義の與那那逆とるる。堪も天庭の降魔の利劍と振て逆賊遠親と誅  
たる其功定不莫大なる。故小鞠谷の家臣夷瀨の土民們推て素藤と主將とて  
俱不孤城と成り。在り是素藤が次心一郡の主あり。あをのそ大方のめん隊の  
屬て勉て忠義を盡さん。與の當國の送も。日裏あをのそ。尚野心の者  
る。あをのそ。素藤奉公の。初折々心と其頭不潜めて。虚実を探り。邪正を現し。論を  
く。諷諫と悖逆の惑ひる。あをのそ。論を。従つて。折御征伐を。あをのそ。  
先鋒た。欲も。是素藤們が情願。是れ。あをのそ。兩個の倍臣浅木碗九郎嘉保奥利  
本膳盛衡們瑣小の土宜と獻呈して。死言と伺ひ。今より。年毎。奉公。貢獻と  
缺く。あをのそ。食言。照據。あをのそ。家臣們が連署の起請文一本を  
まの。あをのそ。只管免許と請け。是より。先義成主の。那小鞠谷如満の。殘皇。あをのそ。

あるも。支の定る。自恣暴慢の罪と糾きて民の塗炭と極んと。先隠秘使を  
りて。虚実を探せむ。既して如満の家臣遠親を殺せし。遠親は又諏訪の神  
主。菅田素藤を誅滅せし。一郡は民安堵せし。支の注進あり。折那素藤のいぬる  
比夷瀆の民は病疫と黄金水と救ひし。土民の為を愛敬せし。諏訪の祝せし。  
たる。支の顛末まで。今又小鞠谷の家臣が素藤の功績を訴稟  
きて。他を以て館山城主の御ま。請ふ使者の口状折言書の趣。東六郎相辰が披露  
を。更その意をゆゆ。即便新故の三家老。杉倉本曾介。氏元堀内藏人。自行  
荒川兵庫助清澄も。俱小閑室より。取て件のよしを評議あり。今采由小鞠谷の家臣  
が請稟を。館山城主の事。那素藤が支の趣。賞せし。とも。砥碓の石。玉似た  
で。弊牛の子。羊小似。賢奸の知。彼が願ひ。依る。我欲意見。付麻と。同  
る。四家老。俱答て。御定。是。遠慮あり。然る。けれども。素藤が。大功の。世。亦。そ。

心の邪正を知る由あり。且那士卒士民が望み儘せし。る。夜。異日野心の色を。て。ゆふ  
所。眞実を。その。折。斧。鉞。加。る。とも。才。一。郡。一。城。の。三。總。を。併。せ。御。武。界。を。御。征。伐。の  
輒。ろ。今。功。ある。賞。せ。ば。人。の。議論。を。争。何。の。也。臣。們。の。迷。不。意。衷。を。盡。して。議。する。処  
か。の。如。し。又。賢。慮。を。旋。ら。され。る。は。べ。る。や。と。稟。せ。し。義。成。は。領。して。その。議。定。は。至  
極。なり。水。清。れば。魚。住。ま。る。人。察。る。れば。友。と。し。の。古。語。ある。を。我。猜。査。眞。遠。慮。不。過  
は。快。々。免。許。せ。ば。れ。と。その。議。不。儘。も。ひ。ける。徳。而。の。次。の。目。碓。九。郎。本。膳。の。義。成。朝。臣。の  
見。参。り。素。藤。館。山。の。城。主。なる。死。す。の。下。知。状。を。賜。り。けれ。ば。恩。を。辨。し。退。り。出。て。館。山。城  
投。て。か。つ。あ。る。け。る。勢。ひ。の。つ。も。あ。る。べ。い。余。後。菅。田。素。藤。の。逆。旅。の。柱。衣。は。華。々。たる。伴  
當。々。徒。へ。稻。村。瀧。田。の。西。城。へ。初。参。の。式。礼。首。尾。敕。正。ひ。て。義。成。并。小。美。我。実。主。の。見。余。來。の  
折。斃。し。ま。る。せ。幸。出。物。を。賜。り。て。諭。し。示。さ。る。箇。條。あり。四。司。の。威。風。四。下。と。拂。一。頭。を。拾  
ぐ。づ。も。あ。ら。ぬ。れ。素。藤。憶。む。汗。七。礼。小。孰。さ。る。暴。夷。の。言。乘。の。外。所。做。知。及。進。退

殆困たいていくく。倭而素藤わにの安房あはの逗留とちゆう幾日いくにちもあて。館山たてやまの帰城きじやうしり見の武威ぶゐの憚りおそ。

その機きと攪かんと思おもひく。藤南ふじなんの城主じやうしゆ武田むけだ信隆しんりゆう長柄ちやうへの榎本えのきもとの城主じやうしゆ千代丸ちやうだま豊俊とよとむ推津おしづの

城主じやうしゆ真里谷まにや信昭しんしやうと陽やうの里見りみは従したがふ。陰いんの獨立どくりつの志しありて。稻村いなむらの住すまひりし。

素藤すふじ便直べんちゆうと旋まわりて。利害りがいと説と和順わじゆんと薦すする。豊俊とよとむ信隆しんりゆう信昭しんしやうの俱とも稻村いなむらの

城じやうへ奉勤ほうきんして。怠慢たいまんの罪つみと陪話ばいごする。一ひと義成ぎせいの義ぎと答こたへて。其田そのでの當家たうけの忠ちゆうあり

とて。東西とうせいと賜たまふ。素藤すふじ是こゝより。驕おごりて。その状じやう始はじめは。獨ひとりは。思おもふ。

我計わがけい較けう皆當みなあたりて。如意にぎする。所ところも。思おもふ。無な限げん賢良けんりやう良親りやうしんと。色いろも。酒さけも。親おやむ。

這郡縣こゝと管領くわんりやうして。一城ひとじやうの主しゆする。百計ひやくけい千慮せんりよも。无な益えき似にて。料りやうる。里見りみ義実ぎじつの裏うらの

隱道いんどうの始はじめより。政事せいじの関かんり。又また當主たうしゆ義成ぎせいの素すより。思おもふ。將しやう小こあ。ね。も。飛と羽は守しゆ

文ふみの後のち生な然ぜんの。憚おそる。と。み。つ。つ。饒にぎはりて。早はや晚ゑんの。酒さけ色いろは。樂たのし。耽たのむ。程ほどは。前まへ代しろの。鞠まげ谷や

如滿にしみつが。愛あい妾めかけの。朝あ親しん夕ゆふ顔かほと。喚こゝろ做しる。兩ふた個ごの。美う婦め人ひとの。け。と。そ。依よ側わき室むろの。あ。ら。

洞房どうぼう花燭けんしやくの酒宴しゆゑん快樂くわいらく。王わうと炊たせ。桂けいと新しんりて。敢財用かんさいりやうの費ひと數かずは。倭わても尚なほ厭いと

と。ま。け。れ。い。艶えん曲きよく歌か舞まふ。妙たうき。少せう女によと。京きやう鎌かま倉くらの。微ゐめ。左ひだり右みぎの。侍しやうと。歌うたの。も。あ。ら。舞まふ。

酒席しゆせきの。良りやうを。添そよ。ける。素藤すふじ既すでに。奢しや侈ちと。極ごくめて。民たみの。望のぞみ。と。失うし。ひ。け。ら。る。安房あはへ。空そら

を。せ。ん。と。思おもふ。後のち安やすき。と。人ひとの。口くちと。塞ふん。與よ。安房あは上かみ。然しかる。舊ふる族しゆ名な家けの。子孫しよそんは。民たみの。

零落ぜいらくする。と。尋たづね。て。城じやう内うちへ。喚こゝろと。て。叮てい寧ねい小こ扶すけ持ぢと。あ。れ。も。も。真ま實じつの。所ところは。な。ら。二ふた重じゆう時じの

程ほどあ。て。て。へ。へ。更さらふ。又また思おもふ。當たう城じやうの。士し卒しゆつ們ら。都みやこて。小こ鞠まげ谷やの。昔むかし臣しんと。只ただ勢せいは。不ふ従じゆうふ。の。と。

高量かうりやう敵てきの。あ。ら。る。と。要い緊げんの時ときは。い。く。と。一ひと人にんも。馮ほう心しんは。不ふ足たる。是こゝは。異いは。熊くま谷やの。頭かぶ

也や。憶おもひ。も。再また會あは。る。礪ら時じ願ねがひ。平へい由ゆ張ちやう金きん作さくの。俱とも武ぶ勇ゆう小こ長ちやうと。め。且かつその。心こゝろ操さくも。

我わが不ふ孝かう順じゆんの。う。と。え。旋まわ風かぜ二ふた郎らう詩し九く郎らう們らと。同どうト。か。る。約やく束そくと。あ。ら。る。の。も。あ。れ。は。情なさけ々々地ぢの

他た們らを。招まねき。と。て。帮たす助すけふ。と。言いふ。思おもふ。と。々々。麻あ葛か思おも助すけと。喚こゝろ做して。心こゝろを。思おもふ。直ちゆう多た一個いっごうの

若わが黨たうの。件けんの。使しを。吟いん附つて。密ひそ書かきと。一ひと裏うらの。金かと。取とり。し。と。そ。の。地ぢ方はうと。誨おしる。と。て。那な熊くま谷やの



八天傳九傳卷五



五

八天傳九傳卷五



多雲の富素藤  
酒色子馳る  
願八盆作剪徑  
舊好の書と得る

八天傳九傳卷五

八天傳九傳卷五



る不贈られず金あり思ひ隨ふ打扮うち連立て上総る館山と投ていそ程小約莫四  
 宿ありふしと件の城の来まされれば城主の故郷に在せ折舊好のり毎も見奉る請  
 ふふも素藤あるる對面して仕と元一禄と與へ幾程も登用して老黨の上在ら  
 けり又那麻葛馬助の軍身之親弟兄も在りぬるが御向密使の立られて出でたれを知  
 るのりて逐電をうと思ひてその同僚們が商議して支使を許し素藤の知れ  
 きてさる沙汰を寝ねけり然而件の願入盆作が葛田の家宰ありより主の  
 愆を知らざるをゆるすも本者修と薦めり素藤は心憚りて春は花秋月觀の興  
 とそ猛可土木の工と申して課役小民の艱苦と思ひて又或時の歌儼田樂の舞甚る  
 ごと造らるる良材と擇み奇巧を集めて費用と肩もはせ候る故に采邑の租税を  
 ちも重くされとも不足られ借りと返さるるを云と許て省免を請ふ村長も素  
 藤呵々と冷笑ひて都々夷瀆の民毎の裏に熱病を皆米死ねりて黄金水の

奇方ので救れらる誰が恩を又那病疫のとも我の折金さへ貸て他們が貧病を  
 せり殺せし郵語の雨雲存て笠と忘る異民の身勝ふ余る鳥許の白徒の搦捕て  
 首と刎し然も去嗷訴已ぶる忽もそと下知せし有司們件の村長を捕て獄金不  
 敷系けり是れを駭けりて歎く村長の宅眷に客們の城主の家宰礪時願入平田張盆  
 作の内縁と求め折觸々黄白と贈りて只官恩赦と乞ひける黄白の光の折も黄金  
 水と其の效ある村長の辛くして死するをゆるされもその社役を合放されて所持の田園と  
 家庫ま都て没官せられ是より水も飲ぬ無下の窮民も苦しむるを憐れぬのわらり  
 ける然も城主の非理の徴の素よりして多る老黨願入盆作が會るも尠うね約莫  
 夷瀆に在りては社客も經紀見も信て故の小鞠谷殿が優りありと嘆く那某  
 甲の村長も徴りて愁訴を做すものも罪せられぬを幸しと世に春さる人心眞愛へ秋の中  
 のもきたる歎の露務と共ふる光陰を弥る采邑の民も惨に素藤の心術素の表裏



中。稻村の里見家六年始の参勤寒暑の音向年毎小怠ると云く且隣郡の城主  
へも好と通し人情を虧ぎて最正首小交参れればの年来素藤の驕奢の風聲あり  
といふもその内々のゆりて逆謀野心の所行るれば敢て非と云ふの事居るの年と麻止たり  
素小文明十四年との夏の時候素藤が愛あり兩個の側室と交す朝顔と夕顔の俱ふ  
時疫不犯されて長沙の術もその效るれば素藤太く駭真愛ひて信折虫那神祠の水を  
合より黄金と浸して用ひ必即效あらん例の樹の水と汲合せよとて殿醫師小奴隷と従へ  
て諏訪の神社へ遣せしふと空まきとてかの参那樟の上より虎の程小狭朽抜けて  
下るる虎といふふるぬ信故小神水の一滴もいづと報るを素藤不疑ひて其頭より  
あるの参道目とゆひ走りふあふむる水もれその甲斐とてもるのり外の水  
優ま死欲とて件の社の頭より神の洗井の水と汲合せよと一提桶を求るれば素藤望を  
失ひて心のとる思ふも却已ぶあふれ黄金と多くその水一宿浸とて次の日兩個の側

室小鷹ゆり小水異るれば効はく朝顔の朝開をまふ夕顔も亦勝る夏は日影小立  
枯れて花を宿とまふ素藤の左右の小持直王と碎は似く心胸焦れ哀  
慕の念ひかゝるまふ不衆うち向ひても真愛ひて帝ふもまふる歌舞舞曲も倒し慰免  
かゝる二伏の溽暑の既小退れて秋風涼しく身随小無笠電てのまわりける一日雨を殿首とそ  
而三個の近習とて城樓小登りて那這と城下の街衢と看且ま程小衆人亦片一奔走と  
物と迎ふ似くると素藤を訝りて那何とと尋れば近習の毎答ていふもいも聞食れと  
他日者世小名高る八百比丘尼と迎るあんと小素藤尚あるをその亦甚る女僧と  
んとゆひ向へ然も若狭小一個の老尼ありうち見の四十ありまればも人その年齢を問へば八  
百餘歳と云ふる因て世の人形貌若狭は八百比丘尼と喚做りされ年来山執虫と里  
へ毎小疎り小衆生済度の與小と近曾猛可小立出で諸國と徧歴止まるとゆえ  
まふ貴賤渴仰せざるも迎る地方小福あり雨を禱晴を祈る小感応灼然とるるる

病病久く身迫りて向死とせしもの比丘尼の十念を受るは立地本復去定業の  
 きて瘡りたるも。値偶きもの病苦を忘れ必成佛とす。その中小一層奇は人の妻まれ  
 良人まれ死して年を麻止るも哀甚の念切ふして一番まきほりまめ。比丘尼は乞  
 い京其の亡魂と煙の中願してをせるとりて過るる里に母の轎子をりてこれを  
 迎へて宿する家と面目を憐れ而件八百比丘尼の目當面に来ませと云風聲果して  
 搗鬼を昨夜の布善村に止宿あり。今日這城の下の本町迎ると。今朝より最  
 妙え。然目今商客那衆人の八百比丘尼の迎ふおひめと云と素藤うち听てそを最  
 奇にたふそ我も欲するや。あれ今宵の八百比丘尼と城内へ招きて對面して  
 さうと有司お告示して町人們に下知せ。快き下と云と。馳て城樓を下りける。今程は這  
 館山の城下町人們の那活佛を迎へて送不競ふて立出る。猛可に城主の嚴命あり。比  
 丘尼と云く城内へ俱一まらせと下知せられ。衆人齊一呆果て。何ぞ何ぞいふ。と云く。

不い限のまければ。鄙語のくやく。穉見と地頭小克んよのまければ。終比丘尼の轎子と  
 城内へ昇入れて。然而役人の遞與けり。現奇と好む人心耳と貴目と賤め。這城内の老黨  
 若黨。淡本碗九郎。奧利本膳們と首と。雜兵奴隸お至るも。昨今少知る比丘尼は法  
 驗誰と疎。幽小思ふ。比丘尼と相迎へ。馳て客房まで茶と薦め。果子も。多非時料  
 理の管待いす。奥多。近習們と云く。主の素藤お件のと報へ。奥と對面せられた。

獨閑室おても。程お姑且く八百比丘尼の兩個の姉妹。不案内をせられて。素藤の身邊お  
 束身と。それ人の噂違ひ。千歳お近。鄙語の虚詐八百秋。面白く形瘦て。雪を  
 載る豆竹の婿。危る。眼涼く眉秀て。用後れる秋の蓮の殼香を。れを艶る。

身。白輪子の夾衣を着て。黒の蟬羽像。紋紗の法衣。錦の袈裟。被る。此是  
 一箇の尼法師。年。東深山に在り。身の。信暗か。打扮の。偏。折。主。晋。去  
 けん。精。亦。怪。む。足。な。も。今。更。の。不。覺。て。ら。目。衛。方。程。小。比。丘。尼。の。馳。儲。の

ひらりつる。素藤の指をきりて。不純なる数珠と徐小丸繰るの。又のよもるの登時  
幕田素藤を八百比丘尼の對して。喃女菩薩某の當城の主素藤之弓箭合身ハ  
武勇の外。佛の道疎れ。法驗耳の真。以て渴望の思ひ。已るを幸ひ。一と我城下ハ  
宝駕を枉らんと。思ふ。猛可く請待をる。ん身ハ女仙。秋觀自在。秋齡ハ既ハ八百歳の  
久し。保ちぬ。まゝ。世の人稱。若狭多。八百比丘尼といふ。まや。その羨。いふ。不  
不死の仙術の学ぶ。と。速。ふ。そ。あ。ん。ん。ま。く。く。壽命を欲。の。久。迂遠。之。即效  
え。を。時。今。出来。秋。采。邑。豊。年。の。少。を。あ。れ。雨。と。禱。暗。を。祈。奇。特。亦。今。茲。を。要  
す。只。願。一。世。去。り。我。側。室。們。を。す。す。す。不。り。其。廢。を。術。あ。べ。や。と。問。ハ。比丘尼ハ。點  
頭。て。原。來。豈。皆。人。徳。小。も。少。知。あ。り。と。我。法。名。ハ。妙。椿。を。れ。世。の。人。通。て。八。百。の。名。成  
員。せ。ハ。玉。椿。の。長。生。を。身。故。を。九。百。の。折。名。と。更。り。九。百。比丘尼。と。い。ふ。然。ハ。妙。椿  
と。喚。る。が。穩。當。不。を。信。め。れ。右。左。ま。れ。右。も。あ。れ。世。の。人。を。幻。り。え。ま。る。方。去。術。ハ。佛。の

教。わ。ね。も。我。身。深。山。在。り。時。料。を。異。人。小。傳。授。せ。れ。稀。人。ハ。施。の。相。公。の。兄  
す。欲。り。も。の。比。時。疫。也。共。侶。と。去。り。那。朝。貌。と。顔。の。刀。自。達。不。は。べ。今  
宵。准。備。と。做。一。受。と。せ。ま。ん。と。易。一。の。意。衷。と。透。徹。を。奇。瑰。の。猜。語。ハ。素。藤。驚。れ  
且。歎。ひ。て。其。憑。一。次。も。不。准。備。ハ。何。れ。致。入。誨。と。請。問。ハ。妙。椿。答。て。否。修。法。也。然  
去。る。の。も。信。を。か。奥。も。一。室。の。内。ハ。戸。帳。と。深。く。無。意。で。机。案。ハ。一。箇。の。香。爐。と。措  
く。後。て。更。蘭。る。時。候。相。公。ハ。左。右。と。遠。ま。り。獨。る。一。室。小。御。坐。ね。今。宵。丑。三。時。候。小。を  
那。美。女。達。を。入。ま。り。見。深。信。を。肝。要。れ。と。素。藤。怡。悦。ハ。勝。ぎ。然。ハ。其。の。期。小  
る。不。程。の。姑。く。緩。坐。受。と。更。別。室。小。席。と。設。て。御。食。饌。叮。寧。を。り。れ。ハ。妙。椿。推。解。す  
尋。く。去。法。衣。と。脱。枕。と。乞。ひ。て。備。小。人。の。を。久。く。熟。睡。を。さ。け。る。  
作者曰俗の若狭の八百比丘尼の事。虛実詳るを。按。考。小。奥。羽。觀。迹。聞。老。志。卷。第。十  
九。小。云。若。狭。國。小。白。比。丘。尼。と。號。者。其。父。一。旦。山。入。り。て。異。人。小。遇。以。與。俱。小。一。處。余

到れ始一天地而別世界也其人一物を與て曰是ハ人魚也これ食ハ六年と延之不老と  
 公父推乃て家ヲ歸れ其女子迎致して其衣帶を取ら因て人魚と袖裏小得ら乃  
 此と食ら蓋内女子の壽四百歳世ハ所謂白比丘尼是也原本漢文今假名を又諸國  
 里人談云若挾國小濱の空印寺ハ八百比丘尼の住一処ハ則御影あり側ハ洞穴  
 あり其奥限りと知ハ土人云當寺五世已前の住持の穴ハ入りて奥と掃ら小三  
 日と經て丹波の山中ハ出まらる相傳ひハ僧あり其處ハ住ハ齡八百歳ハ其容  
 貌十五六歳の杜美々として八百比丘尼と稱ハ里語云此女僧ハ人魚と食ハ故ハ長壽  
 多しとモ又塩尻或向帝云若挾國八百姫明神ハ俗ハ八百比丘尼と云何の神の子を答其社記の  
 詳多しと云れども其由ハ但古事記ハ大年の神の子羽戸山の神大氣都比賣神城  
 娶て若沙那賣神と生まるり也蓋此神欽といふことハ聞老志ハ白比丘尼とて壽  
 四百歳と云然と信景翁ハ八百姫明神の事ハ孰も果不知らねと原是齊東

野人の語も虚実の詳を成る如く願ふ件ハ八百比丘尼ハ唐山の小説ハ所来ハ夏  
 亞流るん今ハ編み但その綽號と洞穴の事ハ借用するのハ洞穴の事ハ下回ハ又  
 寓言といふも本づく所ハ其まはる者官作者の用心を知るべし  
 却説ハの日も暮ハ素素藤ハ先近習ハ吟附ハ奥多ハ小室と檜帚ハ戸帳を無て  
 燭臺机案香爐るハ準備するも整えけれハ八百比丘尼と喚覺ハ夕饌ハ羞めとて  
 婿嬢們を遣せハ件ハ比丘尼ハ熟睡して叫ハ喚ハ覺むとハ左右ハ程ハ更圓とて  
 子の半ハ素素藤焦燥且疑ひてみづら其首ハ赴て喚覺さんとせハ程ハ妙椿  
 登ハ睡ハ覺て水ハ乞ハ嗽ハ引れて出て来ハ素素藤ヤヤと喚近着て女菩薩既ハ那  
 期ハ那時も筆も書ら不ハ久ハ呼ハ妙椿謀ハ微笑ハ惴ハるハ脱落ハ  
 備ハ準備ハ二室俱ハ素素藤怒ハ復ハ卒ハ速ハ身ハ起ハ  
 先ハ立ハ一室ハ赴ハ戸帳ハ掲て程ハ外ハ坐ハ占ハ妙椿ハ後ハ跟ハ機案ハ對ハ



妙子  
 椿夜  
 返香  
 焼く



懐より香一裏念出と香爐より火を撻起し口咒文と唱る徐よ香と世裏とそれの  
 怪しむ左右植る銀燭光と失ひて朦朧とる隨小韻郁とて立升る烟の裏の忽  
 然と頭れ美人ある但見る長短那身小稱して材昂と低く玉顔の三月の櫻花の  
 吉野の山お鼓香ほ如く眉を仲秋の新月の赤石の浦お底お似たり小町態は細  
 要背風靡靡く楊柳も及至衣微像る素肌龍腮の珠玉を延久輝れる玳瑁の  
 櫛子花の蝶あり白銀の釵見解る身長も餘る元平の雲鬢臍臍園る綾羅の  
 袂の目お赫変て陸奥山お黄金花開錦繡の裳の地上お曳て龍田の川お丹楓葉流る  
 秋波の巧く愛敬溢れ蓮歩軽く羅綺の中勝る千金擲る厭とへも玉音  
 のま聴くことお神邪人邪妖幻邪正是沈魚落雁閉月羞花の妙年二一の佳人今  
 らを看て初て知る盛短は朝貌も果敢る潤む夕顔も夜光の前る燕石もば亦鳥鳳の  
 傍る鳥雀も死と羞思素藤の魂浮れ心湯けて狂お像く美人の側お衝と寄せて

抱死任めんと程おあ合をれぬ煙と共お形の滅てまろけり姑且と素藤のやな我お  
 復くる貌と急お改めても尚疑ひの解され更お妙椿のうら對ひて喃女菩薩思お小優  
 たるお身の妙術久し滅りる我胸豁けて一霎時の尉おられもあるお死の人の  
 ら我亡側室朝貌と夕顔とをせんと他們兩個お弥増る美人をえせし甚麻も故そ  
 今の世お像の如く少女あふ何を歎久非除朝貌夕顔が存命て左右お果るとも他們  
 身の暇を取してる少女と妻おせ恨らら然る美婦人を産る如く人の言言は  
 美を現て漫お宵と焦さる果敢る惑ひを轉て又更おの思その所行る秋事情を  
 听まほし教愛といふを妙椿鈍やとちんての悟りぬる昔唐山漢の武帝の鐘  
 愛持お深くける李夫人早世あう武帝の哀慕を勝玉で今一お李夫人を  
 ちかると歎ぬひと方士木子少翁が慰めまうて返魂香と焼く煙に裏ま李夫人の  
 奪權且頭れと帝親く亦肉とけく悲ままく歎て他のひ詩は是邪非邪さく







安房へ七赴け。介程素藤の礪時願八平田張盆作淺木碗九郎們と召近着て件は  
 其に示せの大家俱の壽延て其の秋に於ては國主與功なりまま相公の御所望るん  
 其那里も異議あるべし縁談既に成熟して里見殿の婿になりなま錦の上花を添  
 當家の敏系目疑ひる。快吉左右のあれかと只管稱て已ざりけり。悠り一程の奧利本膳を  
 行装と敷て伴當にて豊俊小趕着んと東西合支を安房と投てを急ぐる。這目又素  
 藤の八百比丘尼と留置く。離根亭小赴て榎本の城主千代丸豊俊と媒妁は憑る  
 支悠々と報知して我の里見大功あり月老も亦その人氣の婚姻必成就せんと女菩薩の  
 引接を美婦と取れる歎びと查一と説誇れ。妙椿頭と傾せを然る所因のあつた  
 吉凶のまゝ知り易くぞ支尙成る。又別せぬ術もあらん。空秋ひるまゝと素藤  
 自覺て又以てもまろけり。是もの後素藤の稻村の吉左右と今日秋明日秋といふ程の約  
 莫五七日と経て奧利本膳盛衛の稻村より來て素藤に報る。御所望の一條を

千代丸殿の云と骨と折りのゆかど。支救はに重見殿の言を素藤抽た。所望の  
 介の兄障のまろの婚姻の人の大札再考。そのれは迷ふと。第一年庚の擇其。墓田の  
 京家の人のへも。本貫家系詳る。我家の清和源氏大新男嫡流され。第一相心  
 かに且素藤の初老の人の我の兄濱路と。二十歳の長短の徳の年庚も相心か。む  
 只這障のまろ。濱路の四個の女あり。そのまろ所縁と。ゆめ女兄と超て先他を人の妻に  
 まろの順逆の理も亦錯る。まろと那人の需あり。心か。まろのい。まろの推辭は疑  
 まろの美を以左も右も宜く傳る。まろと仰られ。千代丸殿のい。まろの狭胸苦く。思ひのへ  
 右のまろ首尾を思ひ絶せ。ゆめ女兄と稟せ。其の身。暇のゆめ女兄。豊俊王の月。榎  
 本へ還る。ゆめ女兄。素藤のまろ。忽地聲と。并立て。その安。ゆめ女兄。人。時運。衰  
 の里見の初。安西の。食客の。發跡。山下と討ち。磨。安西の。所領。を奪略。し。ふ。我。亦  
 小鞠。合。賊。巨。遠。親。を。誅。戮。し。衆。を。推。さ。れ。て。當。城。の。主。あり。まろ。の。義。を。勇。誰。う。甲。乙。の。い。か







其日不ひ退きく社や祭まのり旅びれば。御ご食じ心しんの儲たくわるる必かな定まるる用もちの所ところ作つくるる是こゝ等らのうとと權けん頭づのり。  
 傳つへよとと言い示しして三社の神かみ主と碗わん九く郎らう們ら小こ牽けん出し物ぶつと賜たまはるる館くわん山さん還かへるるのり程ほどはなななとと。  
 稻い村むらの首くび尾び什じ麻まと思へばのり胸むね安やすくて碗わん九く郎らう們ら還かへるるとも小こ四し五ご日にち小こ七しち浅あ水みづ碗わん九く郎らう們らのり神かみ主と相あ俱いして稻村むららのかり多ます即便すなは主の素す藤とう小こ園えん主の喜よろこ悦びのり之の趣おも明かるる。  
 年とし正せい月げつ十じゅう五ご日にち小こ嫡ちやく男なん太た郎らう義ぎ通と誥ごとのれらうと箇くわん様やうと報はかるる素す藤とう斜せとの。  
 飲のひて肚はら裏うら小こ思します。八はち百ひやく比ひ丘かみ尼にのり計けいるる処ところ果はくて毫ごも差小ことも義ぎ成なりのり恭こう誥ごとの。  
 通とと遣はなす我園えん套たい入いるる然しかづば先ま籠かご城じやうのり准じゆん備びともあらずと初はつて老黨たう願げん八はち盆ぼん。  
 作さく碗わん九く郎らう本ほん膳ぜん小こ件けんのり秘ひ計けいとも長なが示しと情々せう小こ城じやう内ないに戰米まいと合入あはれつ矢種やと貯火くわ硝しょうと買せまどとと那期かと遅くとなる。徳とく而し今いま茲こゝも果敢あるる暮くれて明あく文明めい十じゅう五ご年ねん癸みづ卯ののり。  
 春はる正せい月げつ十じゅう一いち日にち。毛もう野の道だう道だう郎らうが鈴茂さ林りんのり復ふ讒ぜん言げんとの。日にち稻い村むらのり城じやう内ない小こ里り見み安やす房ぶ守しゅ義ぎ成なりのり嫡ちやく男なん太た郎らう義ぎ通と誥ごのり初はつ探たんのり祝いのち義ぎのり又また上かみ總そうるる館くわん山さん城じやう王わう墓ぼ田でん素す藤とうが去歲さいのり冬ふゆとの。  
 御ご曹そう司し義ぎ通と誥ごのり初はつ探たんのり祝いのち義ぎのり又また上かみ總そうるる館くわん山さん城じやう王わう墓ぼ田でん素す藤とうが去歲さいのり冬ふゆとの。

萬ま葉は葉は同どう処じょ殿てん吉きち雲うん頭づのり兩りゆう社しゃのり八はち幡ばん並ならび小諏す訪ぼうのり神かみ社しゃも詣て奉幣へいあるべとと十二じふ日にちのり。  
 朝あ巳しの時とき小こ御ご曹そう司し發はつ駕かとなるる第だい一いつのり伴ばん長ちやうのり老らう黨たう堀くわ内ない藏ざう人にん貞せい仍じやう並ならび小杉さし倉くら木も曾そう介けい。  
 氏うぢ元げんのり長ちやう男なん杉さし倉くら武ぶ者しや助すけ直ちやく元げん姪めい母ぼ夫ふ小こ森もり衛ゑい門もん篤とく宗そう小こ傳でん浦うら安やす兵へい馬ま兼けん勝しやう近きん習じゆ田でん稅ぜい力りき。  
 助すけ逸いつ友ゆう吉きち公こう八はち郎らう景けい能のう這ちやう們らを宗徒たうのり從じゆ駕かと侍品しん三さん十じゅう名めい雜ざ兵へい二に百ひやく五ご十じゅう名めい長ちやう幹かんのり槍しやう。  
 三さん十じゅう條じやう弓きゆう二に十じゅう張ちやう鳥ちゆう銃じゆう二に十じゅう挺てい兼けん馬ま十じゅう疋ふ小こ荷か駄だ二に十じゅう疋ふ醫い師し二に員げん宰さい領りやうのり雜ざ色しき十じゅう名めい今いま。  
 番ばんと晴と打粉こなるる前まへ駈か後ご從じゆのり華か美み上じやう總そうと投てを俱くにらけ去回かい隣りん國こくのりのり。  
 皆みな是こゝ里り見みのり封ふう内ないを心安やすと似たらぬ義通と幼ごう少しやうとも究きゆう竟けいのり老らう黨たう若じやく黨たうとも謀ぼう。  
 是こゝれるるる人ひと因よて當時じのり地ち理りと致るる安やす房ぶ園えん長ちやう挾けつ郡ぐん稻い村むらのり城じやうのり地ち同どう園えん安やす房ぶ郡ぐん長ちやう。  
 須す賀かと距るる一いつ里り許ことの今いまのり古こ城じやう迹せき詳じやうとも却かへ長ちやう挾けつ郡ぐん稻い村むらのり上じやう總そう園えん夷い滿まん。  
 郡ぐん並なら善ぜん村むら小こ赴しゆく小のり路ろ程ほど一いつ日にちと遠く二日にちと易易いと先稻い村むらのり數かず里り一いつと天。  
 津つ小こ到たうるる天てん津つのり濱はま荻あし濱はま荻あしのり内ない浦うら内ない浦うらのり小こ溪せき生せいるる安やす房ぶ園えん長ちやう挾けつ郡ぐん件けん件けん。  
 八はち大たい傳でん九く軍ぐん卷くわん五ご

浦小送誠と喚做き嶋の殺生禁断の地と云ふ小漢の日連談生古迹ある世の人の知る処  
る。然り而小漢より市ヶ坂不到れ、這地方も房總の封疆と云坂と登れ、上總國夷漕郡の  
属き市ヶ坂より臺宿上野勾屋山田鍛山最上坂大樟羽賀館山小幡普善今布  
是則安房の天津より上總の普善の赴く路程十里有餘といへ、相村より赴て、  
十二四里過ぎるべし。まればも羽賀館山の間山路險阻にして、且岐路より尙獨り、  
之をく土民と云ふ、御道すお做され、迷ざるものあり、稀に因て羽賀館山と過し、大樟  
より新戸と喚做す村落、赴げ、その路頗遠といへ、岐道の迷ひるるべし。あざと見見、  
黨堀内杉倉小林浦女們豫より相計ひて羽賀館山の山路と過し、大樟より新戸  
へ俱き、小義通幼少く、一日七里過ぎ、首途の次の日、四月、中を、新戸に到り  
、久人其里一宿人馬と憩へ、本月十五日の早朝より、所の社衆あべと、伴當小御示り、  
間話除般系却説義通御曹司八居の伴當俱せられて、正月十四日の未下刻、既小を

上總より大樟村まで、未久程、忽地騎馬の青侍あり、稻村の城より走り來て、御曹司の後  
陣より堀内藏人貞杉倉武者助直元、小報を、昨日、今子御發駕の後、堀内、主令政  
持病の積聚暴発、發りて、鍼灸茶餌の驗なく、昨夜身故あり、又杉倉主の渾家の  
昨夜難産の忌あり、辛くして生れる、赤子の則、死胎也、産婦の幸い、免れぬ、是より、御  
沙汰あり、藏人、或武者助門の服織産穢の障あり、社衆の友伴不達、當職、小森衛  
門篤宗と浦安兵馬兼勝、相委ねて、速退、たのふ、勿論、貞杉の妻、親類、おの  
忌服、稟る者、見伴不存、るる、貞杉、同断、ま、し、お、下知、あ、使、お、七、お、各、美  
知、お、と、詞、急、迫、く、演、使、て、杉、倉、氏、元、荒、川、清、澄、東、辰、相、連、署、の、奉、書、貞、杉、  
直、元、通、與、あ、く、兩、人、俱、あ、く、ち、敷、馬、死、て、恠、れ、猶、豫、せ、と、と、て、隨、便、人、を、走、ら、し、て、小  
森、衛、門、浦、安、兵、馬、兼、勝、と、告、お、け、り、這、時、御、曹、司、義、通、大、樟、の、村、長、許、一、要、時、人  
馬、を、駐、せ、り、小、休、の、折、多、け、れ、小、森、浦、安、の、兩、伴、長、い、と、御、曹、司、を、お、も、て、馳、後、陣、

来ふれば貞仍と直元の稲村より到来ある奉書と篤宗兼勝們不存と云々我々不  
 慮の服織より快立かへひとあり死下知既かかぬ如くあま本意するものあり神事  
 及び殿守護の大任不在の地御領へとも只小心を以て事あるを  
 篤宗兼勝異議及びを諾して卑職們不才ながらも忠義の人讓  
 るべく思ひを伴の受へ心せられ日夜の侍衛由断る兩三見程して御歸城不既其  
 快退りあひひと貞仍直元は各々服織不憚りて御曹司見糸せ其首下る  
 引返来貞仍が妻の親族も四五名伴當の内あり他も忌服係りて貞仍直元  
 と共侶小解して稲村へ還るを侍品七名再伴の四五名折猛可減けり  
 程小稲村より騎馬の使不立れる若黨の範内世四郎と喚做して家老隸の米上  
 るが貞仍と直元の兼書と受とりて在下のふりて注進せられて件の人々不元た  
 ちて馬より踏り鞭も鳴りて稲村を投てかり去り六呂返さる毎に今や路次成

のそまゆく堀内貞仍が妻去歳より積取の病着不臥てあり然とも昨今身故  
 べうの思ひざり折折と嘆き又直元が妻の懐胎を臨月へ仲春ある一月え  
 やく生れ死胎とあれ本意不達して只その妻の恙るを切ても思ふべし徳而件の  
 人々かへりて三里許既小老の暮れか其首不歌店と投て七次の日稲村へ還  
 け話分兩頭介程は葛田權頭素藤の豫の計畧その圖不當りて今茲正月十五  
 日小義通の發駕の豫のつえある先秘密使も路次の動静を探る  
 その者十四日下晡小かたの候も今番義通の從駕の士卒二百四五十名俱不幼君  
 守護あり今日末下刻大樟村まで來身折稲村より騎馬の使あり伴の老黨堀内貞  
 仍が妻へ身故の杉倉直元が妻の難産のつえあり神支不從ふべとて召還されぬ  
 又那老黨の老貞仍が妻の親族も今采曹の伴當の内中不在の他も忌服係  
 るとて身の暇と賜りて大樟村よりかされ侍品六七名ありを再伴も甚なる後陣の

わらざるやと報ふ素藤鉄のなを憶も額不加えてその又はたは造化するも八百比  
 丘尼が別不位に那四家老の智勇あり義通不俱して来るが支の障りふせぬ奇  
 術を以て追退けんとしれうの果と違ふ今宵諏訪の社頭より大樟樹の朽虚れ  
 内不精兵を躰一置て明日社叅の折義通を擒せんと勿論あれも多勢とてせむ  
 前驅りの伴當們おん玉されて支の難義ありやせん然るも小勢その左右と拉々不  
 便へふまると思ひ難て獨肝胆と摧く程不と名黄氏昏るり一時候城内をうら巡る雜  
 兵們が訴ありその支極めて奇怪を城の東門の樹下小大なる洞穴猛可のせを深  
 さ計りながら因て先試み潜り入るゆいふ奥へ最廣なる諏訪の社本の大樟の朽虚の  
 内不續たす信んが這城内より那木虚中不到んと地道の往還自由不思議のなほ  
 志と生るふ素藤駿馬にて且勢も大なる吉足も亦八百比丘尼の我宿望を資不は那術  
 ると疑ひいせとらうも兩個の近習小燈燭を秉らとめぐり走り出て伴の洞を檢

まふその外不違はぬ速隊配して這地道より二百人又外面より三百餘人内外一度不起  
 ちて義通の伴當と一個も漏れを數捕え我も亦地道より那社頭不赴して親小冠  
 者と禽せんと餘の支の箇様々とその進退と定るも礪時願八平由張金作波木  
 碗九郎們を首とて士卒齊一勇立てて準備とせしめ休題再説は夕御曹司  
 義通の新戸不到着するゆいれ村長の家と旅館も明日の社叅の準備あり折春の  
 日のまごさ春と下哺るゆいれ伴長小森篤宗の浦安兼勝と商量して支執する老兵戎  
 殿臺の頭へ遣らし先那三社の光景とせける日暮春て老兵們かかると那三社の頭や  
 最大松を松杉ありを就中諏訪の神社十抱許の大樟のその幹朽虚ありはあり  
 宜ふ稀有なる老樹を内不數人を坐らしと報ると篤宗兼勝の所々俱不眉戎標軍  
 めてまうる明日御參詣の折その樹下より雜兵を立て非常不備ふ御封内を  
 も館山の城主の譜第あり今世の人心料りかたはのなれ只小心ふくま非除野



心の者いりとも。余る老樹の朽虚さあり。毒蛇の隠れ住むとあり。送るべきの意をいりとも。  
と。その夜士卒の宿舎を思慮るに。社寮雑兵の安んず熟して。諾むる當國久し。静  
謐なる。那野心の毎ある。況件の社の頭。毒蛇をどの栖むくも。あらはし。用心は過  
たし。と。あまの笑も。まうけの是。先素藤の館。山の城より。老黨奥利本膳と  
新戸に旅館遣して。美酒佳餚の人情あり。御曹司到着の賀び。演。小本林篤  
宗對面して。月を来意。鞠。本膳答。然し素藤宿望。下か。御曹司の  
遠く来。三社。詰。面。何。是。優。去。今宵。御旅館。同候。見。参。せ  
ま。思。ゆ。折。風。寒。目。目。昨。今。病。臥。為。体。失。敬。至。極。是。非。及。言。是。亦。有。  
陪。臣。奥。利。本。膳。と。路。次。の。安。夜。特。回。の。興。講。獻。芥。の。愚。衷。表。せ。る。本。膳。を  
留。置。れ。明。日。御。導。導。さ。れ。か。路。次。の。敬。言。固。未。明。士。卒。言。多。出。せ。願。ふ。を  
か。さ。駕。と。枉。れ。當。城。立。寄。め。ら。と。面。目。と。と。稟。せ。の。美。小。と。か。と。演。

か。篤。宗。と。れ。ぞ。う。ち。所。て。城。主。の。好。意。ま。り。は。か。す。遮。莫。今。番。社。寮。の。小。子。幼。少。と。も。  
外。へ。立。寄。り。ひ。と。館。義。成。の。豫。嚴。命。あり。且。清。道。の。も。伴。當。多。い。は。の。美。由。亦。元  
益。小。似。す。那。三。社。の。伴。當。は。案。内。の。者。も。い。和。殿。の。勞。多。及。大。く。是。我。們。が。私。談。る  
ら。ぬ。館。の。御。談。ひ。は。是。等。の。御。主。人。宜。く。傳。達。あ。ら。せ。御。親。切。の。趣。後。刻。披  
露。仕。ん。快。々。退。り。ゆ。い。と。の。そ。を。立。て。從。ね。本。膳。の。強。難。て。伴。當。と。お。て。夜。支。館。山。の  
城。還。り。の。徳。而。之。詰。且。御。曹。司。義。通。君。の。烏。帽子。將。表。東。晴。の。小。轎。子。ゆ。ち。乗。て。新  
戸。の。旅。館。と。立。出。め。へ。老。黨。小。森。衛。門。篤。宗。小。傳。浦。安。兵。馬。乘。勝。近。臣。田。稅。力。助  
速。支。甘。屋。八。郎。景。能。們。の。侍。品。二。餘。名。雜。兵。都。二。百。餘。名。前。後。左。右。の。從。ひ。て。  
先。殿。臺。の。頭。の。正。八。幡。の。神。社。へ。と。俱。し。あ。ら。は。し。程。又。那。奥。利。本。膳。の。十。字。街。衛。の  
雜。兵。を。幾。名。款。從。へ。て。夙。め。途。を。迎。て。案。内。の。先。と。逐。して。路。次。の。非。常。と。敬。言。免。け。ら  
る。小。程。近。邸。の。莊。客。幾。百。名。款。公。子。の。社。寮。と。拜。見。せ。ん。と。暗。る。天。の。星。も。着。る。も。ヨ。ク

路傍に聚合たり。後思ひ合まれども素藤の伏兵も暮れ下る戎衣と隠さん  
 とその所為をり。既して義通の件に社前小判あり。雞栖の側小制騎牌中頼朝以  
 来の舊制多し。因て人馬を駐めさせ。轎子を出せ。右小森林馬宗あり。左浦安兼勝  
 あり。田税逸友先小立ち。甘屋景能の後。跟て幼君の大刀と持て。這餘の近習童  
 唐従と共に四十五名。敬言固の雜兵四十五名。齊々整きて。石階の上下左右。皇列を  
 威儀儼然。光景之徳り。程小義通の杖を本宮小登り。當社の神主出迎て  
 幣帛と奉り。武運長久の壽詞。唱ふ。登時浦安兼勝奉りて。駿馬一疋。大刀一口。白  
 銀三千挺。獻供の目録と遞与し。徳而義通の内陣を拜礼あり。その間神樂堂を  
 祢宜們が吹鼓折し。得親の田舎神樂と奏たり。夏果て。義通の宇佐の神社に詣り。小  
 作法初小異る。只その獻供同く。大刀馬代る。白銀を。三千挺。おさむ。源家の  
 氏神を。當社の拜礼夏果て。諏訪の神社へ。赴て。那大樟樹の頭。小森馬宗の

指揮より。御内の雜兵十名許。之餘も。退途に。敬言固あり。各桿棒と衝植て。専非常の  
 備へ。既して。御曲司の詣來あり。と。皆え。大家棒と備置て。跪坐して。夏拜坐  
 介程。里見御曹司。義通君。亦復諏訪の鶏栖前より。轎子と立。老黨近習守  
 護せられ。杖を本社に詣り。その路一町有餘あり。秋尾石の左右。松柏多く。並植る。老樹  
 る。と。の。幾世歴以上。及て。苦滑。路直り。その中。那大樟の一樹。觀る。遠く千  
 枝の。陰。青葱と。て。世の。稀。稀。れ。大家。敬言。馬。代。る。御曹司。の。本。性。童子。の。似。似。  
 みる。外。視。も。觸。り。其。頭。小。近。着。の。小。程。小。案。内。小。立。る。本。膳。の。神。主。輝。と。吐。け。本。土。の  
 か。二。走。る。折。故。意。端。緒。を。断。り。半。履。一。隻。脱。棄。て。多。く。樹。蔭。小。退。死。る。程。も。あ。り。な  
 義。通。君。の。杖。の。頭。と。徐。々。と。過。り。あ。り。と。幾。多。き。忽。然。と。し。て。那。樹。の。虚。を。連。放。る。鳥。銃。の  
 响。と。共。幼。君。の。左。右。小。從。小。兩。個。の。老。黨。小。森。馬。宗。の。背。と。敷。り。又。浦。安。兼。勝。の。頭。と。痛。く  
 敷。り。傷。れ。れ。れ。俱。息。絶。る。這。大。變。胸。と。透。せ。田。税。逸。友。甘。屋。景。能。の。也。脱。近

トモチ  
義通と  
しり  
橋  
ゆき



大傳乙軍卷五

六

大泉堂藏

素藤  
訪の  
誣  
社  
神



台ん八ん  
作かあん  
あとお  
くはあ  
れと別  
図いこ  
白ああ  
ゆせり

ハノ作大車

扈從の毎齊一吐嗟と云ふ走取以て幼君の盾もろく果敢る由敷あるもの七三  
ける。余程の大樟の頭を警言固の雑兵們的頭の上と蜚れ銃丸の備る甲斐もろく駭  
れて。敵も多し。逃るもの。物の要の連なり。進退都て度と失ひる折之ゆきと本  
虚より。願れ居る。賊兵或は短槍小眉尖刀を見たり。走取ると。御曹司の近習  
們の。肩の寄せと。推隔々々々殺結ぶ。烈に。矢を。撃つ。勝負を。分る。けり。  
又那奥利本膳が。本社。の。敬言。固と。伴て。中置る。三。三。個。の。隊。兵。を。先。に。找。り。横。さ。め。咄。  
噓。で。駈。破。れ。り。見。る。士。卒。三。數。を。御。曹。司。の。身。邊。に。衛。る。もの。中。に。一。個。の  
賊。兵。走。蒐。り。捕。捕。んと。し。ける。義。通。透。き。小。刀。を。抜。て。殺。拂。ひ。ぬ。刃。尖。片。の。賊。徒。若  
も。研。り。て。苦。叫。び。て。仆。れる。折。り。近。く。賊。將。の。是。則。素。藤。之。義。通。の。後。方。より。利。手。を  
合。て。動。き。持。方。小。刀。を。打。落。し。て。放。さ。す。と。角。ひ。受。て。當。面。春。才。の。十一。の。小。腕。衛。り。を。喪。ひ。て  
勢。ひ。暴。る。強。敵。の。當。る。べ。し。め。られ。ん。竟。刃。を。拵。合。せ。て。吐。嗟。と。叫。び。ぬ。回。り。も。素。藤。の

義通と探縮め。脇腹に抱れて。又那木虚引かき。田稅逸友。昔屋景能。よく。迫。り。て。う  
へ。と。驚。怒。り。共。保。持。る。賊。徒。を。殺。拂。ひ。ぬ。趕。ふ。程。の。櫓。の。内。より。又。打。出。す。筒。响。高。い。鳥  
銃。の。免。友。の。景。能。も。敷。合。て。矢。場。外。に。仆。れ。り。程。の。素。藤。の。義。通。を。生。拘。り。て。地道。  
を。潜。り。て。城。内。の。洞。口。より。出。て。來。り。留。守。を。委。ね。碗。九。郎。們。は。示。し。誇。り。ら。義。通。と。野。原。く。  
室。の。閑。筆。け。り。是。より。先。に。諏。訪。の。神。社。の。鶏。栖。の。頭。下。向。に。坐。る。里。見。の。伴。當。り。三。三。  
か。り。遠。く。の。銃。响。と。叫。ぶ。居。る。人。聲。景。大。家。駭。け。て。噪。立。て。原。來。社。頭。の。異。変。あ。ら。ん。尋  
思。小。及。び。相。合。て。安。危。と。伺。ひ。ぬ。と。馬。の。三。つ。の。銃。多。歩。並。取。次。の。槍。の。鞘。外。も。澤。々  
と。喘。雄。の。士。卒。前。後。と。争。ふ。て。走。り。入。り。と。せ。程。思。ひ。ぬ。後。の。方。より。素。藤。が。伏。兵。二  
三。百。名。忽。然。と。て。聚。合。來。り。真。先。に。找。む。賊。徒。の。頭。人。是。則。別。人。を。礮。時。願。八。平。田  
張。盆。作。左。右。不。備。一。雜。兵。の。幾。十。槍。の。鳥。銃。を。一。度。連。發。さ。す。れ。ば。响。け。天地。を。動。く。  
宛。百。千。の。霹。靂。の。隊。軍。鬼。れ。る。不。異。る。が。憐。む。一。里。見。の。士。卒。の。又。茲。也。も。幾。十。人。放。敷。の

日暮樟と仆れけり。登時願八盆作の賊徒を打ち槍を拵て三十七お嘯て鬼ヶ里見代士  
率ハ既ハ名ヲ尋ク躬方と敷せしかども。高毛も槍も踏住て。這里と先途と戦ふ程小直衣面  
る。奥利本膳們的義通の老黨近習と大々る。敵果ハ賊徒を驅て。又  
前後より扱も息も類も攻め。然ハ里見の伴當ハ悍り。所ハあなも大刀折れ  
勢ハ内躬も名も思ハ恥と知る。敵と引組と刺違へて。屍を其首も曝き。多くその餘名も  
る。義通の命と免れハ絶。之戦ハ越。果ハ。悠而願八盆作の素藤の逸早く。義  
通を擒ハ。る。其の速と本膳們ハ。うち。聴て。造化精妙と。不勝の歎。即便敵の馬武具を  
一隻も送。ま。雜兵們ハ。奪命。し。常の路を。走。て。凱陣。を。登。時。奥利本膳ハ。預  
け。れる。隊兵を。俱。して。入。那。大。樟。の。朽。塵。も。地。道。を。滑。る。俱。ハ。館。山。へ。還。り。の。畢。竟。義。通。敵。を  
食。ひ。て。伴。當。も。戦。歿。も。る。後。の。話。説。甚。麼。を。そ。の。次。の。卷。ハ。解。介。る。を。聽。ひ。か。

南總里見八犬傳第九輯卷之五終

